

# 葛西 久二（かさい・きゅうじ）

## 1、プロフィール

戯曲家。疎開中の作家太宰治を金木に訪ね、太宰道場の門下生となる。道場では「生意気君」と呼ばれた。太宰の小説「母」の「小川君」は、葛西がモデルである。

<生没>

1923(大正 12)年9月 17 日～2011(平成 23)年7月 29 日

<代表作>

戯曲「雨神楽」(「津軽文学」第2号掲載)

<青森との関わり>

木造町出身。西北地方の文芸誌「津軽文学」に戯曲を発表。「木造町の年表的文化史」を「広報きづくり」に連載した。

## 2、作家解説

大正 12 年9月 17 日、西津軽郡木造町(現つがる市)に、葛西久吉、とき の次男として出生。生家は明治の頃から金又(かねまた)旅館として青森県官指定旅館であり、国・県・軍関係者の他、民俗学者折口信夫などが宿泊し繁盛した。木造町立向陽尋常高等小学校から県立木造中学校に進学。戦時中は横須賀海兵団を経て、海軍飛行予科練習生となり、鹿児島海軍航空隊二二五分隊、徳島海軍航空隊三三分隊に所属した。

戦後、友人木村久邇典らと疎開中の作家太宰治を金木町の生家に訪ね、大いに薫陶を享け、「太宰道場」の門下生となった。太宰の小説「母」(「新潮」第 44 巻第3号、昭和 22 年3月1日発行)の「小川君」は、葛西がモデルである。太宰の生家を訪ねた小川君は軍隊での体験談を語った。小川君は上官に対し生意気な言動を吐き、度々殴られたのだが、両方の眉を剃り落したところ、態度も生意気であ

るとして、さらに上官に殴られたと言う。以後、「太宰道場」では、小川君こと葛西は「生意気君」と呼ばれるようになった。

昭和 34 年 3 月に発足した「津軽文学の会」の同人となり、生家の旅館が総合文芸誌「津軽文学」の連絡先、合評会場となった。同誌第 2 号に、戯曲「雨神楽」(54 枚)を発表。「お母(おガ)」の台詞の一部。「止めへじゃ、止めへじゃ」、「神経この」、「てんぼな話だ」、「ばが童子(わらし)この」、純津軽風の台詞が並んでいる。

同年 6 月、五所川原商工会議所で開催された「太宰治を語る座談会」では、ユーマアたっぷりに、「太宰氏と地方文化」と題して講演した。

平成 14 年 1 月より、地元木造の著名人の足跡を整理した「木造町の年表的文化史」(29 回)を、「広報きづくり」に執筆。「彼の長身白晳の異国的美貌が水際立っていたからであろう。しかし彼が一流の本物の詩人であることは知る人はなかった。」(「広報きづくり」No.479、平成 15 年 2 月発行)と、詩人一戸謙三を紹介している。

平成 23 年 7 月 29 日、つがる市の病院で急性肺炎により逝去した。

### 3、資料紹介

#### ○「津軽文学」第 2 号

雑誌

1959(昭和 34)年 8 月 30 日

210 mm × 150 mm

「津軽文学」は、西北地方の執筆陣による総合文芸誌(第 1 号、昭和 34 年 4 月～第 5 号、昭和 36 年 2 月)。第 2 号(昭和 34 年 8 月)に、戯曲「雨神楽」(54 枚)が掲載されている。中農の家庭、神楽の様子が、純粋な津軽弁で語られている。